

ヨブ記9章32-33節 「神と人に手を置く仲裁者」

1A 正義なる神

1B 創造にある力と知恵

2B 正しい方

2A 仲保者への呻き

1B 人となられた神

2B 執り成す方

本文

ヨブ記9章を開いてください、今朝は9章32-33節をお読みしたいと思います。午後にヨブ記8章から10章までを学びます。

32 神は私のように人間ではないから、私は「さあ、さばきの座にいっしょに行こう。」と申し入れることはできない。33 私たちふたりの上に手を置く仲裁者が私たちの間にはいない。

私たちは、ヨブが財産の全てを失い、息子、娘も失い、それから自分の体が恐ろしいまでの皮膚病にかかり、それで心の呻きを神に吐き出しているところを読んでいます。友人三人が彼の傍らにいたのですが、ヨブが生まれた日を呪い、自分は生まれなければよかったと言ったので、その中の一人、最年長のエリファズがいたたまれなくなって、口火を切りました。しかし、彼の考えは基本的に「苦しんでいるのは、罪があるからだ。」というものでした。

それでヨブは、その友人の言葉を聞いて慰められるどころか、もっと苦しみました。なぜなら、自分は、このような苦しみを受けるに値する罪を犯した覚えが全くなかったからです。天秤にかけて、自分の罪と苦しみでは圧倒的に、理不尽なまでも苦しみが大きかったからです。

そしてヨブは、神が自分を苦しめておられて、その痛みによって神は自分を見張っている、監視していると言いました。

そこで、二人目の友人ビルダデが口を開きます。それが8章から今日の通読箇所です。2-3節、「いつまであなたはこのようなことを語るのか。あなたが口にする事ばは激しい風のような。神は公義を曲げるだろうか。全能者は義を曲げるだろうか。」ビルダデは、何と言ったらようでしょうか、「熱心だけれども、人のことが何も分かっていない」ということでしょう。杓子定規な物の見方しかできていません。

ヨブの言葉にある含みを受けとめていません。神が、ヨブの信仰の真価を試すためにサタンが

彼に触れることを許されたという、前代未聞の実験の中にヨブは置かれているのです。ゆえに、その背景を知らないヨブは、「いったいなぜなのだ？」という問いを、渾身を込めて神にぶつけているのです。人間側には回答のない問いをぶつけているのです。その空気をビルダデは少しでもいいから、感じ取ればよかったのです。最年長者エリファズは、多少なりともその控えめさがありました。しかし、ビルダデはその空気を読めていません。それで「激しい風のようにだ」つまり、「激しいだけで意味のない言葉だ」と言って一蹴しているのです。

そして、「神は公義を曲げるだろうか。全能者は義を曲げるだろうか。」と語っています。この発言自体は正しいです。神は正義を曲げない方です。その通りなのですが、続けて、「あなたは罪を犯して、あなたの息子と娘も罪を犯して、それで当然の報いを受けているのだ」と言いきってしまいます。ここが間違っているのです。

私はしばしば皆さんにお話しするのですが、「正しいことは、正しくない」ということが言えます。自分が正しいと思っていること、それは大事にしななければいけません。けれども、その知識は自分の正しさを証明するために使うのではなく、むしろ愛をもって人を建て上げるために使います。また、自分自身がへりくだって、悔い改めて、主の似姿に変えられるために使います。正しいと言い張れば言い張るほど、言っていることは正しくても自分の身勝手な正しさになり、神の正しさから離れてしまうのです。

1A 正義なる神

しかし、このビルダデの言葉に対して、ヨブはさらに自問します。9章2節でこう語っています。「まことに、そのとおりであることを私は知っている。しかし、どうして人は自分の正しさを神に訴えることができようか。」その通りなのだと言っています。神は不義をなさる方ではない、神は正義なのだ、ということ認めています。もちろん、すべてのことは、自分と神との正しい関係から生まれ出ます。自分が神から離れてしまうから、あらゆる問題が起こります。神との関係が正されるならば、他の問題も自ずと修正されます。垂直の関係を正すことによって、水平の関係が正されます。

しかし、そうではない現実の側面もあるのです。それがヨブ記のテーマです。友人の語っている、「蒔いたものを刈り取る」というのも聖書に書かれている神の真理です。しかし、それだけではない私たちの思いを超えたところにある神の主権と御旨があります。ヨブは、自分自身も友人とまったく同じ神学を持っていて、罪を犯せばその刈り取りをすることは知っているのです。けれども、自分の身に起こっていることが、その神学を乗り越えてしまっているから困っているのです。

ビルダデは、無慈悲にも息子や娘が罪を犯したから、彼らは死んだのだということを語っています。けれども、ヨブは彼らが罪を犯したからではないことを知っています。実に、彼は心の中で子供たちが神を呪ったかもしれないと思って、いけにえを一日の終わりに捧げさせたぐらい用意周到

だったのです。それにも拘らず、問題が起こってしまいました。自分には測り知ることのできない罪まで、神は問い詰められるのか？という大きな嘆きと苦しみ、ヨブの言葉の基調になっています。

そこで、「ならば神に対して自分の正しさを訴えたい。」とヨブは思いました。友人に話しても、全然埒が明かないので、神ご自身に直接訴えようと思ったのです。そこでヨブは、神と自分が裁判所に出廷することを想定しました。そこで、自分の正しさを神の前で証明するのです。私は悪いことをしていない、潔癖であることを訴えたいのです。ところで聖書では、法廷を想定した正義の論議が出てきます。例えば、イザヤ書の冒頭で、主は天と地を証人に立てて、「イスラエルが不義に満ちてしまったけれども、ご自分がイスラエルに対して何か悪いことをしているのだろうか？」と訴えている場面が出てきます。物事の正否について、法廷を想定することによって、何が正しく間違っているかを明らかにするのです。

しかし、ここで大きな問題があります。神は、自分が対等に訴えることのできるような対象ではなかったことです。

1B 創造にある力と知恵

まず神は、創造主であられ、力に富み、知恵に満ちておられる方です。神は地震を起こして地を揺るがします。神は天体の星の運行をすべて司っておられる方です。これだけ大なることを行なうのは、全能の力と測り知れない知恵が必要です。この無限大の神に対して、この自分はあまりにもちっぽけで有限です。ですから、こちらが持っている知識で自分の正しさを訴えたところで、圧倒的な知恵と知識をもって言い返されるのがおちです。9章3節には、「たとい神と言い争うと思っても、千に一つも答えられまい。」とあります。

2B 正しい方

そしてヨブは、14節から神は正しい方であることを話しています。その正義は完全であり、自分が語ろうにも、この不完全な自分はたちまち罪に定められてしまうと嘆いています。9章20節に、「たとい私が正しくても、私自身の口が私を罪ある者とし、たとい私が潔白でも、神は私を曲がった者とされる。」とあります。ヨブにとって、神が完全な義を持っており、自分はそうではないことを百も承知なのです。比べようもない存在であり、自分とは引き離された存在であることは知っているのです。だから自分の潔癖さを、持っていけるような相手ではないのです。

2A 仲保者への呻き

このようにして、ヨブは神との大きな開きを意識しました。圧倒的に絶大な、無限大の神と、小さく、御心一つで滅ぼされてしまうような自分の間にある開きです。それで彼が呻きながら語ったのが、初めに読んだ箇所です。「神は私のように人間ではないから、私は「さあ、さばきの座にいっしょに行こう。」と申し入れることはできない。私たちふたりの上に手を置く仲裁者が私たちの間にはいない。」ヨブは、「仲裁者がほしい」と訴えたのでした。その大きな開きを埋めてくれるような、

神と自分との間を調停する人が必要だ、ということです。神と自分との間に手をそれぞれ置く仲保者が必要です。

ところで、私たちはヨブ記を学び、ヨブが人生のことについて、浮かび上がってくる一人の人物がいます。ヨブが正義に関する根本的な問いをしているなかで、その不条理に対して体当たりしている中で、浮かび上がっている方はイエス・キリストご自身であります。前回の学びでは、7章の終わりで、神が自分のほんの小さな罪までも細かく監視して、それを拡大鏡で照らして大きくして苦しめているのだということをヨブが話しました。けれども、そこに私たちはキリストを見ました。キリストはヨブのもっと先を進んでおられました。つまり、なんら罪を犯していないのに、いっさいの罪を行なった人物と神にみなされたのです。こんな不条理なことはありません。ヨブよりも、はるかに不条理です。しかし、その不条理を神は十字架によって埋めてくださることによって、私たちは発狂しそうなこの世の不条理の中で、気を確かにして生きることの勇気を与えてくれます。

そしてここ9章22-23節も同じです。神と人との仲介に立つ方をヨブは求めますが、それはイエス・キリストご自身なのです。「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。(1テモテ 2:5)」旧約の成就是新約にあり、です。ヨブ記の成就是、恵みとまことに満ちたイエス・キリストのうちにあります。

1B 人となられた神

イエス様がいかにして、神と人の間に立つ仲保者となっているのでしょうか？それは、一つに「神であられるのに、人になられた。」ということです。イエス・キリストは神であり、かつ人であられる方です。ヨハネの福音書の冒頭に「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。(1:1-2)」とあります。イエスは神であられ、父なる神と共におられました。したがって、神に手を置くことができます。イエスはまた、「父とわたしは、一つです。」と言われました。けれどもまた、「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。(1:14)」とあります。この方は人となられました。だから、もう一方の手は人に置くことができるのです。

人となられたイエス様について、ヨハネは第一の手紙でこう言いました。「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目を見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、(1:1)」じっくり見て、手でさわることのできた方です。疑いもなく肉体を、そして私たちと全く同じ肉体を持っておられました。したがって、私たちの肉の弱さを憐れむことができました。ヘブル書2章です、「そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。(17-18節)」

先ほどヨブは、自然現象における神の力強い働きを述べたことを話しましたが、イエス様は神としてそのお働きをされました。ガリラヤ湖において暴風が吹いて、舟が転覆しそうになった時に、その波を鎮められました。自然現象だけではありません、レギオンを追い出すなど霊の勢力にも権威と力を持っておられました。しかしイエス様は同時に、ヨブと全く同じように喉の渇きを覚えられたのです。サマリアの女が井戸から水を汲みに来た時に、喉を渇いておられたので、「水をください」と言われました。したがって、イエス様は肉体の弱さを身にまもっていながら、なおのこと神の知恵と力を現していました。

このイエス様が、私たちの内に住んでいるのです。これが私たちにとって福音なのです。私たち人間は、弱い人に同情することはできるかもしれませんが、けれども無力です。そして神は、力を持っておられます。けれどもその力強さと知恵のゆえに、弱く無知な者に近づくことはできません。だから私たちは弱まった時に、「神はどこにおられるのか。」という呻きを上げるのです。しかし、これがイエスにあつてどちらも可能になったのです。弱さの中に全能なる神、知恵に満ちあふれた神が内住することがおできになったのです。この前のエペソ書 3 章で学んだように、牢で鎖につながれていたパウロが大胆に、神の全能の力の現われを語っていました。弱い時に強いのです！「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。(2コリント 12:9)」

ですから、苦しみの時にこそキリストがおられることが、ますますはっきりしてくるのです。どんなに苦しんで、「神はどこか遠くに行かれてしまった」と感じて、そこに、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」と嘆かれたイエスが共におられるのです！

ですから、「キリストが私の内におられる」ということが究極の慰めになります。私たちは試練の時に、苦しみの時に何をすればよいか、という何かをすることを必死に探します。けれども、立ち止まってください、何かをすることではなく、キリストの内に留まることが、試練における戦いの決め手になります。神は知恵に富んだ方ですが、パウロはコロサイ書でこう言っています。「このキリストのうちに、知識と知恵との宝がすべて隠されているのです。(2:3)」だから、キリストの内にいることだけで知恵の知識の宝に満たされます。ただし、このことは、何もしないということではありません。その中で、もちろん語るべきこと、行なうべきことがあります。しかしそれは、内におられるキリストにあつて行ない、または語るのです。つまり、キリストの内にいる自分なのですが、止まっていながら動いているのです。そのキリストが自分を動かし、導いてくださるのです。

そして、「正しさ」については、イエス様はどのような仲介をされたのでしょうか？ヨブは自分の潔白を証明しようにも、神は圧倒的に正しい方であり、たちまち自分は罪に定められると言いました。イエスは確かに全き義を持ったおられた神です。罪なき方であり、聖なる方です。しかし、人として生きておられた時は、神としての評価ではなく、うわべで裁かれることが多々ありました(ヨハネ

7:24)。例えば、ご自分が食事を取られることで、そこにいる者たちが悔い改めることをご存知で取税人と食事をしておられたのに、罪人と交わったというそしりを受けられました。全く正しい方なのに、罪を犯したかのようにみなされていきました。

だからイエス様は私たちの仲介をできるのです。人は私たちについて、あたかも私たちを分かっているかのようにあれこれ言います。そのそしりとイエス様は一体になりながら、なおかつその完全な義によって私たちを守ることができます。弟子たちが断食をしていない、弟子たちが安息日に麦の穂から実を取って食べたなど非難されましたが、イエスはこれらを全て、受けて立って神の義を示されました。イエス様は同じようにしてくださいます。

しかし、うわべの裁きではなく、自分が罪を犯してしたらどうでしょうか？自分が犯した過ちについては、言い訳が利かないことをしています。その場合はどうするのでしょうか？その場合であっても、イエスは仲介者となってくださいました。すなわち、その人間の肉体をもって、裁かれ、罪人となられました。神の御子として何ら不義はないのですが、人間として、罪を犯した私たちと一つになって罪人と数えられたのです。キリストの内においてください。そうすれば、自分は罪人のかしらであることを知りながら、なおのことその罪から全く解放された者として、キリストの義を身につけて生きることができるのです。神の恵みの中で、大胆に神に仕えることができるのです。

2B 執り成す方

仲介の働きはそれだけではありません。イエスの仲介の働きは神が人となったということだけでなく、二つ目「執り成す」ことがあります。イエス様は、私たちのために弁護してくださいます。「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護して下さる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。この方こそ、私たちの罪のための、..私たちの罪だけでなく全世界のための、..なだめの供え物なのです。(1ヨハネ 2:1-2)」イエス様の弁護の根拠は単純です。「なだめの供え物」です。キリストが神の怒りを受けてくださいました。だから、私たちが罪を犯した時も、キリストはご自分の犠牲を持ちだして、私たちのために執り成してくださっているのです。

これは、人間の世界ではあり得ない状況ですが、こんな法廷が開かれました。あなたは、被告人です。父なる神が裁判の席に着いています。検察側には、悪魔がいます。悪魔は、「兄弟たちの告白者」と呼ばれています。そして弁護側にイエス様がおられます。普通であれば、弁護側はいかに被告人が罪を犯していないかを可能な限り弁護します。しかし、弁護人のイエス様はそれを行われません。そして検察側の悪魔ですが、彼が告発している一つ一つはその通りなのです。検察側の冒頭陳述が終わりました。そして弁護側が冒頭陳述を始めます。なんと、検察側に行っていることと同じことを言い始めるのです！「この被告人はこの罪を犯しました。」と言うのです。全然、弁護になっていません。

けれども、その後でこう言いました。「裁判官、ところでこの審議は終わったはずではないですか。この被告人の犯した罪はすでにわたしが肩代わりしました。わたしがその罪を負って、死罪に定められたのですが。」裁判官は、「これで審議を終了する。」悪魔は悔しがっています、またやられてしまったと嘆いています。弁護側がいつも、自分の流した血、罪に対する刑罰を持ちだされると、いつも敗訴になるからです。こうした執り成し、弁護をキリストは、神の右の座におられて絶えず行っているのです。

キリストは復活され、昇天されてから、この執り成しの働きを行われています。預言者イザヤが53章の最後で、復活したメシヤが背きの罪を犯した者たちのために執り成しをすることを預言しました(12節)。使徒パウロは、大胆にもこう宣言しました。「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていただくのです。(ローマ 8:33-34)」

私たちは絶えず、人からの訴えを聞きます。罪定めという言葉を聞きます。自分の良心を責め立てます。しかし、全能なる神がすでに義と認めてくださっているのです。生ける者も、死にたる者も裁きたまわん、全人類の審判者が、地獄に投げ落とし、火と硫黄の池で苦しめることもできる権限をお持ちの方が、あなたを無罪宣言してくださったのです！そして、よみがえられたイエスは、神の右の座に着いておられるキリストが、この神のくださった義認に基づいて、私たちのために執り成してくださっているのです。

そこで大胆にパウロが宣言しました。「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。(ローマ 8:35-39)」

ヨブは神から引き離されていると感じました。無限の神と有限の自分の間に大きな淵を見ました。しかしパウロは大胆に、こうした苦しみの中にあっても神の愛から引き離されることはないと宣言しています。鍵は、「主キリスト・イエスにある神の愛」なのです。キリストが仲介者であられるので、私たちはキリストの内にいるということで、苦しみの中にあっても、その肉体の痛みと心の悩みがあっても、そこに神がおられることを実感するのです。